

第4部会

とは異なる立場の、宗教的な、思想であると考え。さらには、その特異な思想の一致の背景として、西欧近代化の波にさらされた東欧の宗教的ユダヤ人の苦悩（近代化とハシディズム）と、封建制度から近代国家への脱却を余儀なくされた日本人の精神的な混乱、心理的・社会的な精神分裂の状況との共通性を指摘し、加えて、最後に、西欧的な哲学・科学の弁証法に対する究極のアンチテーゼの論理形式としての「楕円の一神教思想」の可能性を示唆することで、本格的な内村とヘシエルの比較研究の輪郭を描く努力の入り口とする。

回心の比較宗教

——廻心とタウバ——

徳田 幸雄

本発表は、「回心」あるいは「コンバージョン」の辞書的な意味によって媒介される二つの概念、仏教における「廻心」とイスラームの「タウバ」とを比較し、そこに意味上の重なりその他に、構造的な共通性を指摘する試みである。まず、それぞれの概念がどのように用いられているかを概観したうえで、問題の共通構造を指摘し、考察を加えたい。

一般に仏教の「廻心」には、罪惡に背を向ける「廻心懺悔の廻心」、大乘へと方向転換する「廻心向大の廻心」、そして徹底した自力の否定を要する「捨自帰他の廻心」の三つの意味がある。ここでは、親鸞を起点とする「捨自帰他の廻心」に着目

したい（以下、「廻心」と略す）。そこにおいて、斥けられるべきものとして強調されているのは、「罪惡」でも「小乗」でもなく、他ならぬ「自力」である。したがって「廻心」は、己の力によって達せられるのではなく、むしろ己の力を放棄して他力に己を委ねることによって実現されるのである。では、この「廻心」において、自力と他力はいかに結びつくのであろうか。この問題を、金子大栄や星野元豊は、「廻心」と「回向」との関係に置き換えて考察している。それによれば、人間の「廻心」がすなわち他力の「回向」に他ならず、両者は逆説的に一致するという。こうした「廻心」に潜む自力と他力との逆説的關係は、禪を背景とする鈴木大拙や西田幾多郎の廻心把握にも認められる。これらを踏まえれば、「廻心」とは、自力の否定と他力の回向とが逆説的に結びつくことで達せられる自己の転換といえよう。

一方でアラビア語の「タウバ」は、「戻る」がその原義とされ、一般に「悔い改める」あるいは「悔悟」「改悛」などと訳される。またこの「タウバ」は、しばしばスーフィズムにおける神秘階梯の最初に位置づけられ、ある方向転換を意味する点でキリスト教の「コンバージョン」に相当する語と見なされてきた。ここでは、さしあたりクルアーンにおいて、この語がどのように用いられているかを概観したい。特筆すべきは、全八七箇所のうち三七箇所、神がこの語の主語となっているという点である。つまりクルアーンにおいては、人の「悔い改め」と神の「赦し」とが「タウバ」というたった一つの語で表現されているのである。このことにこの語の原義を考慮すれ

ば、「タウバ」とは、人が神へ回帰することであると同時に神が人をかえりみることであり、人と神との出逢いが目指される方向転換と解されよう。

仏教における「廻心」とイスラームにおける「タウバ」は、いずれも「悔い」に基づく自己の方向転換を意味する。ただしここで注目したいのは、その意味上の重なりではなく、他力あるいは神の側からのほたらきかけと、人間側の行為とが結びつくという共通構造である。この点をさらに具体的に言えば、人間の真摯な悔い改め、すなわち自己が否定し尽くされたところが、神や他力が臨む場所に他ならず、そこが新たな自己の肯定の起点となるという逆説性である。こうした自己否定即自己肯定という、合理的な把握を拒むような逆説性の只中にこそ、人間と神あるいは他力との出逢いがあると言えるのかもしれない。仮に宗教が、単に人間の営みのみによって成り立つのではないとすれば、この逆説的な出逢いが宗教の核心部分であると言ってもいいであろう。いずれにしても、歴史的に接触があったとは言いがたい、これらの宗教的な概念にさえ見られる構造的な共通性を、各宗教の根底で共鳴し合うような成立基盤を示唆するものとして考えたいのである。むろん、こうした洞察を現時点でただちに普遍化するわけにはいかない。しかし、これをキリスト教の「コンバージョン」やユダヤ教の「シユブ」などを加えたさらなる比較研究の起点に据え、そこにより普遍的な宗教理解の可能性を期待することは許されよう。

ヘーシユカストの祈りにおける身体技法

袴田 玲

本発表は、十四世紀ビザンツ帝国のヘーシユカストを考察に取り上げる。祈りに対して積極的・肯定的に身体を用いることが少ないとされるキリスト教世界においては特異な例と思しき彼らの身体技法について、「ヘーシユカスムの博士」と謳われたグレゴリオス・パラマスの釈義を通じて吟味し、祈りと身体の関係についての一考察としたい。

さて、当時のヘーシユカストは自らの修屋にこもり、独坐して頭を胸につけるように丸め込む姿勢をとり、呼吸を調整しながら「イエスの祈り（主イエス・キリスト神の子、我を憐れみたまえ）」を不断に唱える、という祈り方を実践していた。

右記のようなヘーシユカストの祈りのうち、とりわけ「独坐して頭を胸につけるように丸め込む姿勢」についてパラマスがどのように思想的根拠付けを行ったかを眺めてみると、基本的にこの姿勢をとることによって目指されているのは「ヌースを身体の内（心臓）に送り込み、留める」ことであると分かる。

具体的にはまず、擬マカリオスに依拠しつつ、心臓が人間の身体器官の内第一のものであり、とりわけ思考と関わる器官であると捉えられる。そして、ヌースを心臓に導き入れることが励行されるのは、「静寂の内に身を捧げることを選んだ者たち」が「思考的な部分をしっかりと覚醒して吟味し、正す」ため